

ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える  
市民懇談会報告書

平成18年3月

# 目 次

1	はじめに	1
2	ルーマニア・ブラショフ市との交流の経過および現況	
	(1) 交流の経過	2
	(2) ルーマニア交流事業の現況	3
3	これまでの交流の評価と今後の進め方	
	(1) 市民同士の交流	4
	(2) センターの活動	5
	(3) 市民団体の活動	7
	(4) 武蔵野市民へのPR	8
	(5) センターの経費	9
4	提言 相互交流の発展に向けて	10
資料(1)	ルーマニアとの交流年表	15
資料(2)	ルーマニアとの交流予算	18
資料(3)	日本武蔵野センター活動状況	19
資料(4)	日本武蔵野センター利用者アンケート	20
資料(5)	ルーマニアとの交流に関する市民意見	21
資料(6)	ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会会議要録	25
資料(7)	ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会設置要綱	43
資料(8)	ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会委員名簿 ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会開催経過	44

## 1 はじめに

ブラショフ市を中心とするルーマニアとの交流は、平成4年の国立ジョルジュ・ディマ交響楽団の招聘に始まり、多数の市民・NPOの協力により様々な活動が展開されてきました。現在では、ブラショフ市と協力して、ブラショフ市内に交流のためのセンターを開設して嘱託職員2名(所長及び日本語教師)を派遣し、日本語教育、図書室、ITセンター等を運営するほか、日本文化を紹介し、友好交流を促進しています。

武蔵野市第四期基本構想・長期計画では、国際交流・協力の推進に関し、「積極的に国際交流事業を推進していくとともに、拡大、発展してきた事業について役割分担を図りながら、武蔵野市国際交流協会や関係機関と連携していく。事業ごとに目的を明確にして、単なる繰り返しに陥らないよう、その成果をひとつずつ検証し、更新していくことが必要である。」と述べられています。その前段階に、市民会議として設置された武蔵野市国際交流施策検討懇談会の報告書では、平成16年7月、ブラショフ市との交流に関して、「今後の課題としては、ブラショフ市に設置している『日本武蔵野センター』がパイプ役となって、現地の大学と武蔵野市内の大学との連携を図り留学生の往来を促進すること、一般市民が参加できるプログラムを企画して市民に分かりやすい交流を進めることなどの検討が必要であろう」と提言しています。

この提言に沿って、16年度後半から、市民を対象とした各種のルーマニア紹介事業が行われていますが、嘱託職員の人件費を含めて年間1700～1800万円を使う事業にもかかわらず市民の周知度が低い、市民が参加できる事業が少ない、ルーマニアとの交流を行っている市民団体との連携体制が十分でないといった課題があります。

本懇談会は、現地で日本語教室を開催して10年の節目の年にあたり、このような課題を踏まえて、これまでの交流の成果を検証し、今後の交流のあり方を考えるため、様々な役割を担ってきた関係団体からの委員4名と公募による委員4名により、昨年12月から5回にわたって検討を行いました。

本懇談会の設置に合わせて、ルーマニアとの交流に関する市民意見も募集しました。寄せられた市民意見に対しては、個々に市の一定の考え方も示され、それを参考にして懇談会としてどう考えるかを議論し、意見を付けました。また、ブラショフ市民の意向も反映させるため、現地の交流施設の利用者を対象としたアンケート結果や歴代駐在員、現地職員の意見も参考にして、議論を進めました。

懇談会は透明性を重視し、会議の傍聴を認めたほか、会議の議事要録を市のホームページに掲載しました。

本報告書は、懇談会の検討の内容とその結論について、主要な部分を取りまとめたものです。懇談会の委員名簿と開催経過、市民意見は巻末の資料をご参照ください。

## 2 ルーマニア・ブラショフ市との交流の経過および現況

### (1) 交流の経過

武蔵野市とブラショフ市との交流を年表にまとめたものが資料(1)です。交流の始まりは、ブラショフ市に本拠を置く国立ジョルジュ・ディマ交響楽団の指揮者が武蔵野市の出身であり、チャウシェスク体制崩壊後の経済困難期に、同楽団への支援を市に要請したことに端を発しています。平成4年、武蔵野市、立川市、府中市、秋川市（現あきる野市）の4市が共同して実行委員会をつくり、同交響楽団を招聘しましたが、単に伝統あるヨーロッパのクラシック音楽を側面から支援するだけでなく、交流会やバザー、ルーマニアの子どもたちにリコーダーを贈る運動など市民レベルの支援と交流活動に多くの市民、市民団体が参加しました。

その翌年には、市民団がブラショフ市を訪問し、盆踊り大会や書道、着付け、折り紙などの日本文化紹介活動を行いました。その後、平成7年、10年、14年にも市民団が訪問しています。

市民団体による交流、支援活動も活発に行われました。ジョルジュ・ディマ交響楽団招聘を機に NGO 団体として発足した「武蔵野ブラショフ市民の会」は、会で独自に訪問団を派遣したり、日本語研修生を日本に招聘する活動を行っています。武蔵野市民交響楽団は、平成9年ブラショフ市を訪問し、ジョルジュ・ディマ交響楽団と合同コンサートを開催しました。認定 NPO 法人「プロジェクト HOPE ジャパン」はブラショフ市内の病院に医療機器を寄贈する活動を、NGO 団体の「ACTION International」は孤児院の支援活動を行いました。平成12年には産婦人科病院に医療機関用洗濯機を寄贈するため、「ブラショフの赤ちゃんに洗濯機を贈る会」が設立され、多くの市民団体や市民が募金活動に参加しました。

平成6年、ブラショフ市長が来日した際に、武蔵野市国際交流協会での日本語教室を視察しましたが、同市長は教室のあり方に感銘を受け、ブラショフ市での日本語教室開催について、市に強く要請しました。これを受けて市は、平成7年から3年間、武蔵野市国際交流協会の日本語交流員（日本語学習指導を行うために必要な所定の養成講座を受講した市民）を派遣し、約3ヶ月間の日本語集中講座を行いました。その後は、JICA（国際協力機構）職員により日本語教室が続け

られましたが、交流 10 周年を迎えた平成 14 年に行われた両市の話し合いにより、平成 15 年 11 月からは、日本語教師の資格を持つ者を市の嘱託職員として派遣し、日本語教室を行っています。

平成 10 年には、両市の交流・協力の活動拠点としてブラショフ市の県立図書館内に「日本武蔵野交流センター」が設置され、図書室の運営を中心に日本語教室や日本文化紹介活動などを行っていましたが、33 m<sup>2</sup>と手狭であったことなどから、平成 15 年に現在の場所に移転し、日本語学習支援を軸とした文化交流施設として、日本武蔵野センター（以下「センター」と略します。）と改称しました。センター内には、認定 NPO 法人「プロジェクト HOPE ジャパン」がブラショフ市に寄贈したコンピュータを備えた IT センターも移転し、ブラショフ市民を対象としたパソコン教室が開催されています。

## (2) ルーマニア交流事業の現況

武蔵野市のルーマニアとの交流に関する 17 年度予算は、資料(2)のとおりですが、主な経費は、センターの職員に係る人件費および旅費、センターの建物賃借料、センターの運営費補助金です。センターの運営費補助金のうち、8 割程度が現地職員や弁護士、会計士などの人件費に充てられています。

センターでの活動状況をまとめたものが資料(3)です。日本語教室を中心に、カルチャークラスやイベントなどを通じて日本文化を紹介する事業などが行われています。その他、日本の書籍や日本に関する図書、音楽、映像などを所蔵する図書館があり、館内での閲覧および貸し出しサービスも行っています。また、ブラショフ市が実施する「ブラショフ・デー」や「International Book & Music フェア」などのイベントに合わせ、着物ショーや写真展、日本文化紹介事業を行うなど、広くブラショフ市民を対象に様々な活動が行われています。

武蔵野市民を対象とした事業としては、ルーマニアとの交流を紹介する各種のイベントが開催されています。平成 16 年度には、市役所 1 階ロビーでの日本武蔵野センターパネル展やセンターの前所長とブラショフ市出身の留学生を講師にした講演会が行われました。17 年度には、愛知万博「ルーマニア・ナショナルデー」への市民交流ツアーの実施、武蔵野ブラショフ市民の会と共催での～ルーマニア料理を囲んで～「ブラショフを知る会」が開催されたほか、ルーマニア国立混声合唱団マドリガルの「武蔵野公演」、ルーマニア友好リサイタル「フルートが

奏でるルーマニア」が行われました。

### 3 これまでの交流の評価と今後の進め方

本懇談会としては、これまでの交流は武蔵野市民、ブラショフ市民それぞれに意義があるということで意見が一致しました。日本から遠く離れた文化の異なる国の人々との触れ合いは、多様な価値観を認め合うことにつながり、私たち武蔵野市民の人間性を高めることに寄与したのではないかと考えます。また、日本や日本文化に興味を持ったとしても、経済的理由で日本はおろか近隣国にも行くことが容易でないブラショフ市民にとっては、センターの活動や市民団の訪問により、日本語や日本文化に直に接することができたことは、日本理解の促進だけでなく、グローバル化に対応する人材を育てることに貢献したと評価できるのではないのでしょうか。

現ブラショフ市長であるスクリプカル市長も、日本でかなりの成功をおさめるようなブラショフ出身者が出てきていることが交流の成果であり、ブラショフ市としても武蔵野市のパートナーシップを必要としており、今後ますます交流を深めていきたいとセンターの所長に話しています。

日本語学習支援などは、もともとは国家レベルで行われる内容の事業だとも思われますが、縁あって自治体レベルで実施して現在にいたっています。日本の外務省、在ルーマニア日本大使館からは、東欧における日本の評価を高めるという戦略的課題に貢献する取組みとして、また、在日ルーマニア大使館からは、ルーマニアとの交流を積極的に行っている自治体として高い評価を受けています。日本国内には、東欧の国と交流している自治体は少ないので、パイプの少ない東欧との窓口があるということは、武蔵野市の特色のひとつとして誇れることだと考えます。

本懇談会では、これまでのルーマニアとの交流の評価と今後のあり方に関して、市民同士の交流、センターの活動、市民団体の活動、武蔵野市民へのPR、センターの経費という切り口から検討しました。

#### (1) 市民同士の交流

##### 【評価】

市民団への参加等を契機とした市民同士の草の根交流が続いていることが、両

市の交流の最大の成果と言えるでしょう。

ルーマニアは、高度経済成長の時代に日本人が失ってしまった価値観を懐かしく思い出させる魅力のある国です。家族を大切にすること、お客にごちそうを沢山だしたり、何度も乾杯するおもてなし文化、女性らしさを大事にしていることなど、感性が非常に似ていて共感できます。価値観だけではなく、鉄道では厚紙の切符といった日本では既に使用されなくなったものがまだ実際に使われており、郷愁を誘われます。身近に手付かずの自然が残っていること、日本人にも親しみやすい野菜がたくさんあるのもルーマニアの魅力です。

一方で、ヨーロッパの中世の街並み、生活が残っているブラショフ市との交流は、歴史や文化の違いも教えてくれます。東欧の遠い国が近くに感じられるとき、異文化の度合いが非常に大きいので、時には失望することもあります。いつも大きな驚きと感動を与えてくれます。ルーマニア現地の訪問や武蔵野市内で実施された写真展・講演会などへの参加を通して、日頃あまり接する機会のない東欧のことを知ることができたことは、市民の国際的視野が大きく広がったとって過言ではありません。

#### 【今後の進め方】

現在の交流は大人が中心ですが、今後の広がりや発展性を考慮すると、青少年や学生の交流、子育て中の母親の交流に広げていくべきと考えます。経済状況の違いにより青少年の相互訪問は難しい面もありますが、武蔵野市からの派遣だけでも意義があります。実際の訪問ができない場合でも、インターネットを利用した学校同士の交流や、文通をコーディネートする仕組みづくりは可能です。また、もう少し小さい子どもたちを対象に「0123」や「あそべえ」などでブラショフを紹介する事業を行うことも発展性があるのではないのでしょうか。若い母親同士が子育ての知恵や情報を交換することは、武蔵野市とブラショフ市の双方の市民にとって利益があると考えます。

そのほか、これまであまり行われてこなかった体操などスポーツを通じた交流や経済交流についても検討すべきと考えます。

## (2) センターの活動

### 【評価】

センターの活動の中心である日本語教室の平成18年の新規応募者は、280人で

した。10年前は、60～70人の参加者だったことを考えると大きな前進です。また、現地の日本大使館主催のスピーチコンテストで好成績をおさめたことや、日本語能力試験の受験結果から、日本語のレベルが着実に向上していると評価できますが、これらは、日本語教師を市が派遣し、クラス編成が充実したことによる成果と考えられます。

日本語教室の参加者は、高校生、大学生を中心に小学生から60歳くらいまでの幅広い年齢にわたっています。参加の動機は、日本語や日本文化に興味があるという知的関心が大多数です。日本への留学や日本関連ビジネスへの就職を望んでいる参加者も少なくはないのですが、実際に留学や就職につながる例は少数です。しかし、奨学金を受けて日本へ留学する学生が毎年1,2名いることは、今後の両国の交流を支える人材育成という面からも評価できます。

書道、絵手紙、茶道、着付けなどの日本文化紹介活動も活発に行われており、多くのルーマニア人が様々な活動に参加し、東洋の伝統的文化や先進的産業技術に触れることができることにより、日本そして武蔵野市への理解が促進されています。

センターでは、現地の関係機関との連携にも積極的に取り組んでいます。ブカレスト大学とは、センター職員が大学で書道の講義を行い、大学の学生がセンターで茶道を行う交換授業を行っています。また、JICA職員とは、文化イベントの指導などで協力し合っています。在ルーマニア日本大使館とも相互の事業に出席したり情報交換を行うなど他機関との連携が広がっていると評価します。

#### 【今後の進め方】

これからの交流は、ブラショフ市民との対等な関係での協働プロジェクトにしていく努力が必要になってきますが、その人材育成と実践の場としての機能がセンターに期待されます。センターの日本語教室の指導や日本との交流の架け橋となってもらえるような人材を育てるために、日本語学習者のネットワークをつくり活用していくことが望まれます。

また、日本からブラショフ市への旅行者がセンターの活動に飛び入り参加できる仕組みづくり、武蔵野市民が個人でルーマニアを旅行する際の便宜を図る旅行情報提供サービスなども検討し、両市民が、いつでもだれでも利用できるような、さらに開かれたセンターを目指す必要があります。



### (3) 市民団体の活動

#### 【評 価】

医療機関用洗濯機を寄贈するための「ブラショフの赤ちゃんに洗濯機を贈る会」の活動では、市民団体が連携して大きな成果をあげましたが、交流活動に市民団体や市民が多く関わってきたことが、ルーマニア交流の特徴です。

洗濯機を贈る活動は、政府間の国家プロジェクトでは行き届かない分野に、市民の目線で着目したことで、広範な市民に身近に感じられる活動として取り組まれましたが、このような活動を通して、市民の間に国際協力・支援という視野が広がりました。支援できる喜びを感じることができることも、ルーマニアとの交流が続いてきた理由の一つと考えられます。

NGO 団体「武蔵野ブラショフ市民の会」も当初から市民レベルの交流を続けてきていますが、特に日本語研修生の招聘活動は、ブラショフで日本語を学んでいる学習者への励みになるだけでなく、交流の核となる人材育成の面からも非常に有意義な事業です。

市だけでなく、市民団体の活動によって本当の意味での文化交流ができていると評価します。

#### 【今後の進め方】

市民団体の活動に限ったものではなく、交流活動全体に関わるものですが、懇談会の中で、交流を推進するための組織を設置する提案がありました。市の交流事業課、ルーマニアと交流している市内のNPOやNGO団体、一般市民で構成し、

センターの年間計画の策定や予算の把握などセンターに関する事項、市民参加イベントの企画・実施、市民のルーマニア渡航への情報提供、研修生招聘時のホームステイ斡旋など武蔵野市民を対象とした事業、外務省、在日ルーマニア大使館との情報交換、ルーマニアとの文化交流やビジネス情報の提供を行う「交流事務局」を設置してはどうかという提案でしたが、委員からは賛否両方の意見がありました。賛成する委員からは、「ルーマニアとの交流の意義を市民により理解してもらい、さらに市民に交流を広げるためにも、ネットワークの核としての事務局の設置が必要。市の担当者が十分な現地情報を持っているわけではないので、ルーマニアのことを知っている人たちのネットワークは、市のサポート部隊としても機能するのではないか。」という意見があり、反対の立場の委員からは、「新しい組織を作る必要はなく、必要な時に、市が呼びかけてネットワークをつ

くり、市民団体は、独自に活動しながら、市が企画した市民参加のイベントに協力するという形がよい。」という意見がありました。

この事務局設置案に対して意見はまとまりませんでした。今後も、各団体の独自性を尊重しつつ、必要に応じて、市と関係団体が協働して交流を進めていくことについては、意見が一致しました。

#### (4) 武蔵野市民へのPR

##### 【評価】

ルーマニアとの交流を武蔵野市民に知らせる事業が少なく、交流活動に関する市民へのPRも不足していたため、ルーマニアと交流していることを知らない市民も多いことが課題としてあげられました。

ルーマニアを紹介する事業として、市で、年数回、講演会やコンサートなどが行われていますが、ルーマニアとの交流の実情や交流の成果が市民に十分に伝わっていないと考えます。

##### 【今後の進め方】

市民のルーマニアに対する関心と理解を深めるためには、武蔵野市民が参加しやすい事業、ルーマニアがより身近に感じられるような事業を多角的に展開していく必要があります。

まず、ルーマニアと交流していることを市民に知ってもらう努力が必要です。例えば、デパート等でのルーマニアフェアの開催や、桜まつりや青空市などのイベント会場での我楽多市の開催など、一般市民が大勢集まる場所でルーマニアとの交流のPRをすることを検討すべきです。また、メディア等を有効活用し、積極的なPR努力が必要です。もちろん、市報やホームページを利用した広報も、一層充実させる必要があります。

第二に、日本にきているルーマニア人の話を聞いたり、ルーマニア料理をつくったりといったルーマニアの文化に直に接するような企画も望まれます。ルーマニア出身者との交流は、単にルーマニアについての理解を深めるだけでなく、今後の交流のあり方を考えるためにも重要なことです。

そのほか、在日ルーマニア観光局と協力して、市民向けにルーマニアの観光情報の提供やツアーを実施するなど、市民に見える形の事業を企画することを検討すべきです。

## (5) センターの経費

### 【評 価】

センターの活動は一定の成果をあげていますが、年間 1700～1800 万円のルーマニア交流予算のうち、センター建物賃借料が約 540 万円、所長及び日本語教師派遣経費が約 900 万円であることに関して、経費がかかりすぎているのではないかという観点から議論しました。

センターは、武蔵野市とブラショフ市が協力して設置したもののなので、ブラショフ市にもう少し費用負担を求めているという意見も出されました。実際には、センターの家賃については武蔵野市が負担していますが、センターの職員 2 名の宿舎提供、センターの光熱費、通信費などブラショフ市も一定の負担をしており、ブラショフ市の財政事情を考慮すると、これ以上の負担を求めることは難しいのではないかという意見も出ましたが、提供された資料だけでは十分な議論ができず、本懇談会としての結論を得るにはいたりませんでした。今後、市で費用対効果の観点から事業評価を行い、市民に明らかにすべきです。

センターの所長の派遣が必要かどうかの議論もありました。平成 10 年に日本武蔵野交流センターが開設された時は、日本武蔵野交流センター基本協定に基づきブラショフ市が管理・運営を行っていましたが、うまく機能しなかったため、平成 12 年から駐在員が派遣された経緯があります。現地に適任者がいれば現地の方が管理・運営を行うことも考えられますが、現在のところ現地に適任者がいないので、日本からの派遣でやむを得ないと考えます。

また、日本語教師の派遣をとりやめ、現地で日本語を学んだルーマニア人を教師とすることにより、経費を少なくできるのではという意見も出ました。現地で暮らしている日本人が教えるということも考えられますが、日本語を教えるためには指導者としてのスキルが必要であり、現状では適任者がいないので、当面は人材育成も兼ねて、日本語教師を派遣するのはやむをえないという結論になりました。

多額の経費はかかっていますが、懇談会としては、ブラショフ市民が興味をもったときに、いつでも訪れることができる日本文化の拠点があることは、両市民の相互理解を進めるうえで素晴らしいことだと考えます。

### 【今後の進め方】

長期的な課題としては、現在のセンターの賃貸借契約が平成 20 年に切れます

ので、その時期にあわせ、ブラショフ市所有建物をセンターとして利用できないか等、ブラショフ市と協議していく必要があると考えます。また、建物を賃貸で借りるよりは建物を購入した方が、長期的にみると経費が抑えられると考えられるので、ルーマニア国内で法人登録している「日本武蔵野協会」が、現地法人として建物を購入することなども検討すべきと考えます。

また、現在はセンター運営費の大部分が、武蔵野市からの補助金で賄われていますが、今後の方向性としては、センター利用者にも受益者負担を求めていくべきだと考えます。センター利用者アンケートでも、半数以上が、受益者負担に賛成と答えています。反対と答えた人は1割以下で、残りは受益者負担の概念が分からないという回答でした。例えば、現在無料で実施している日本語教室で、資料代として参加者に大きな負担とならない程度の金額を徴収することは、期間途中で出席しなくなる受講者を減らす効果もあるのではないのでしょうか。

所長や日本語教師の派遣についても、現状ではやむをえないと考えていますが、経費面から考えると、長期的には、センター運営における現地の人材活用を視野に入れる必要があります。

#### 4 提言 相互交流の発展に向けて

本懇談会は、以上の検討の結果、常に経費面からの事業評価を行う必要はあるものの、今後も積極的に交流を進めるべきであるという認識のうえに、取組みの方向性について3項目にまとめて提言します。

##### **援助・支援的な交流から、より対等な相互交流を目指す。**

ルーマニアは、平成元年の社会体制転換後、政治体制の民主化および経済の市場化を推進し、現在も平成19年1月のEU加盟を目指して様々な準備を進めています。交流開始当初とは社会情勢が大きく変わりましたので、武蔵野市とブラショフ市との交流も、将来的には、現在行っているような援助・支援的な交流ではなく、対等な相互交流を目指すべきと考えます。

##### **ブラショフ市民がセンターの運営に協力、参加できる環境づくりを進める。**

センターの利用者アンケートの結果から、ブラショフ市民の中に、一方的に支援を受ける側ではなく、一緒にセンターを支え、協力していくという気持ちが芽生えつつあることが感じられます。対等な相互交流に向けて、受益者負担の導入やアシスタントとして日本語教室に協力してもらうなど、ブラショフ市民がセンター運営に協力、

参加できる環境づくりを一層進める必要があります。そして、武蔵野市に向けて、ルーマニアからの声をどんどん発信してくれることを期待します。

**武蔵野市民が参加しやすい事業を増やし、交流への理解を深める。**

相互交流を発展させるためには、武蔵野市でも、市民が参加しやすい事業を増やしてルーマニアとの交流への理解を深めてもらうことが重要なことです。観光情報提供など市民のアイデアを取り入れ、多角的に事業を展開して、交流人数を増やしていく必要があります。

この報告書の趣旨が多くの市民の理解を得て、今後のルーマニアとの交流に反映されることを願っています。

# 資 料

資料(1) ルーマニアとの交流年表

資料(2) ルーマニアとの交流予算

資料(3) 日本武蔵野センター活動状況

資料(4) 日本武蔵野センター利用者アンケート

資料(5) ルーマニアとの交流に関する市民意見

資料(6) ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会会議要録

資料(7) ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会設置要綱

資料(8) ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会委員名簿  
ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会開催経過

## ルーマニアとの交流年表

年	月	内 容
平成 3 年 ( 1991 )	11 月	ルーマニア国立ジョルジュ・ディマ交響楽団指揮者曾我大介氏(武蔵野市出身)が武蔵野市長を訪問し、楽団への支援を要請。武蔵野市、立川市、府中市、秋川市の4市共同での招聘実行委員会発足の機運が高まる。
平成 4 年 ( 1992 )	7 月 9 月	「ルーマニア国立ジョルジュ・ディマ交響楽団招聘実行委員会」発足。 同交響楽団来日。市民 4,000 人(4市合計)がコンサート鑑賞。ボランティア 100 名参加。4市市民がリコーダー 3,200 本をブラショフ市へ寄贈。来日公演を機に、武蔵野市民が「武蔵野ブラショフ市民の会」を結成。
平成 5 年 ( 1993 )	8 月	武蔵野市民文化交流団(団長:土屋市長)が、ブラショフ市を訪問。日本文化紹介イベント 2 日間開催(武蔵野市児童絵画展、ガーデンパーティ(焼鳥、ラーメン紹介)、盆踊り大会、書道、着付け、剣道、華道、折り紙など)。
平成 6 年 ( 1994 )	2 月 9 月 9~10 月	ブラショフ市長モルズイ氏が来日し、MIA(武蔵野市国際交流協会)日本語教室を視察。ブラショフ市での日本語教室開催を武蔵野市長に要請。 ブラショフ市日本語教室に関する基本協定を締結。 ブラショフ少女合唱団「カメラータ・インファンティス」を武蔵野市、三鷹市、小金井市、田無市、保谷市、調布市、小平市の7市合同招聘。7市でコンサート開催(小中学生とのジョイントコンサート、ホームステイ、文房具をブラショフの孤児院へ寄贈)。
平成 7 年 ( 1995 )	6~9 月 8 月 9 月 9~10 月	第 1 回ブラショフ市日本語教室開催(日本語交流員 2 名派遣)。 武蔵野市民視察交流団がブラショフ市を訪問(弦楽器修理者派遣、写真展開催、日本語教室視察)。 武蔵野市長がブラショフ市を訪問し、日本語交流員派遣事業成果視察。常陸宮殿下同妃殿下のブラショフ市日本語教室視察を迎える。 武蔵野ブラショフ市民の会がブラショフ市を訪問し、日本文化紹介イベントを開催。 トランシルヴァニア・ヴィルトゥオーゾ室内管弦楽団(ジョルジュ・ディマ交響楽団の若手精鋭によるユニット)来日。武蔵野市と武蔵野市友好都市(大崎町、小国町、酒田市、遠野市、川上村)で公演。武蔵野市で小中学生を対象に音楽教室開催。
平成 8 年 ( 1996 )	6~8 月	第 2 回ブラショフ市日本語教室開催(日本語交流員 2 名派遣)。 第 1 回日本語教室修了者 3 名を武蔵野市に招聘。
平成 9 年 ( 1997 )	6~8 月 8 月	第 3 回ブラショフ市日本語教室開催(日本語交流員 2 名派遣)。 第 2 回日本語教室修了者 3 名を武蔵野市に招聘。 武蔵野市民交響楽団がブラショフ市を訪問。ジョルジュ・ディマ交響楽団と合同コンサート開催。
平成 10 年 ( 1998 )	3 月 6~7 月 8 月	ブラショフ市長イオン・ギッシュ氏来日。日本武蔵野交流センター基本協定締結。 第 3 回日本語教室修了者 3 名を武蔵野市に招聘。 日本武蔵野交流センター開設。センター開設に合わせて土屋市長、市議会議員、市民団がブラショフ市を訪問。日本文化紹介イベント 5 日間開催(野点、盆栽、着付け、組み紐、折り紙、書道、絵手紙、空手、生け花、盆踊り)。

	9月 10月 11月 12月	ルーマニア少年少女合唱団、武蔵野公演。 ルーマニア・ブラショフ県知事一行、来日。 トリオ・ブラショフ、チャリティーコンサート。 在日ルーマニア大使館より、ルーマニアと日本との友好関係促進に寄与した功労に対し、武蔵野市長と武蔵野ブラショフ市民の会理事長へ感謝状授与。
平成 11 年 (1999)	1月 4月 8月 12月	ルーマニア日本友好議員連盟会長、来日。 ルーマニア観光公社代表(前ルーマニア観光大臣)来日。 武蔵野市内に本拠をおく NPO「プロジェクト HOPE ジャパン(国際医療支援機関)」が、ブラショフ市内の病院に医療機器を寄贈。 武蔵野市内に事務所をおく NGO「ACTION international(世界の子供たちの生活環境向上を支援する団体)」が、ブラショフ市でワークキャンプを行い、セントラル・パラサメント孤児院を支援。 改築工事のため閉鎖されていた日本武蔵野交流センター再オープン。
平成 12 年 (2000)	1月 3月 4月 8月 9月 11月	日本武蔵野交流センター協力員を派遣。 プロジェクト HOPE ジャパンが、ブラショフ市内の病院に医療調査団を派遣。 武蔵野ブラショフ市民の会が、ブラショフ市から大学生を約 1 ヶ月半招聘。 ACTION international が、ブラショフ市で 2 回目のワークキャンプを行い、セントラル・パラサメント孤児院を支援。 ブラショフ市立産婦人科病院に医療機関用洗濯機を寄付するための募金運動がおこる。「ブラショフの赤ちゃんに洗濯機を贈る会」設立。 ブラショフ市民との交流・協力活動を行なっている団体や個人が集まり、「武蔵野・ブラショフネットワーク会議」を設立。定期的に情報交換を行なう。
平成 13 年 (2001)	2月 3月 5月	ブラショフ市立産婦人科病院に医療機関用洗濯機を寄付。ルーマニア大使を招き、武蔵野市内で贈呈式を開催。 トランシルヴァニア・ヴィルトゥオーゾ来日、音楽会を開催。 武蔵野ブラショフ市民の会が、ブラショフ市から大学生を約 2 ヶ月間招聘(2 人目)。
平成 14 年 (2002)	4月 4~5月 5月 6月 7~8月 8月	武蔵野市・ブラショフ市交流 10 周年記念式典を開催。 みやこうせい写真展「ルーマニア賛歌」を開催。 武蔵野ブラショフ市民の会及び MIA がブラショフ市から日本語研修生を約 2 ヶ月間招聘。招聘した研修生を講師として、武蔵野市民向けのルーマニア紹介及びルーマニア語交流教室を開催。 糸操り人形一座「結城座」の派遣公演をブラショフ市及びブカレスト市にて実施。プロジェクト HOPE ジャパンがブラショフ市内に「IT(情報技術)センター」をオープン。講師を派遣し、IT 教室を開始。 ACTION international が、武蔵野市民を中心に寄贈されたぬいぐるみや人形をルーマニアの子供たちに寄贈。 武蔵野市民交響楽団が「ルーマニアの夕べ」と題した演奏会を開催。 ブラショフ市内で MIA が夏期日本語教室を開催(日本語交流員 2 名派遣)。 市長、市議会議長及び議員団、市民団がブラショフ市で行なわれた IT センターオープンセレモニー、武蔵野市・ブラショフ市交流 10 周年記念式典へ参加。



平成 15 年 (2003)	5~6月 6~7月 7~9月 9月 11月	武蔵野ブラショフ市民の会がブラショフ市から会社員を招聘(4人目)。 日本武蔵野交流センター移設。規模及び機能を拡大し、日本語教室と IT センターも移設の上、名称を「日本武蔵野センター」とする。 日本武蔵野センター職員バラボイ・ジョルジアナ氏が日本語及び日本文化研修のため来訪。 ブラショフ市国際交流部長セシリア・ドイチウ氏来訪。 日本武蔵野センターに日本語教師を派遣(市嘱託職員)。
平成 16 年 (2004)	3月 4月 8~10月 11月	武蔵野市職員が集めた日本の教科書を日本武蔵野センターへ寄贈。 ルーマニア国会議員団、武蔵野市来訪。 武蔵野ブラショフ市民の会がブラショフ市から大学生を招聘(5人目)。 武蔵野市助役、交流事業担当部長、日本武蔵野センター活動視察。1998年の第一協定の覚書を追加締結。
平成 17 年 (2005)	1月 3月 6月 6月 8~9月 8月 9月 12月	日本武蔵野センター・パネル展開催(1/18~2/10 市役所1階ロビー)。 日本武蔵野センター講演会「日本から見たルーマニア、ルーマニアから見た日本」開催。 愛知万博「ルーマニア・ナショナルデー」への市民交流ツアー実施。 ルーマニア国立混声合唱団「マドリガル」武蔵野公演。 武蔵野ブラショフ市民の会がブラショフ市から大学生を招聘(6人目)。 ~ルーマニア料理を囲んで~「ブラショフを知る会」開催。 グレルーシュ氏によるルーマニア友好リサイタル「フルーツが奏でるルーマニア」を開催。 「ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会」設置。

資料( 2 )

ルーマニアとの交流予算 (平成 17 年度)

(1)交流事業費

嘱託職員 1 名 (日本語教師) の報酬・共済費・報償金	3,987 千円
所長・日本語教師の一時帰国等の旅費	1,000 千円
所長・日本語教師の海外旅行傷害保険料	335 千円
日本武蔵野センター建物賃借料	5,394 千円
日本武蔵野センター運営費補助金	2,797 千円
その他 (郵便料、図書購入費、消耗品費等)	330 千円
計	13,843 千円

(2)中高年齢者・障害者雇用創出事業経費

嘱託職員 1 名 (センター所長) の報酬・共済費・報償金	約 4,000 千円
-------------------------------	------------

( 1 ) ( 2 ) 合わせて平成 17 年度予算額は、約 1 7 8 0 万円

< 参考 >

平成 16 年度日本武蔵野センター運営費補助金決算

単位：円

費 目	金 額	備 考	
1 人件費	1,839,732	常勤職員(1名)給料 顧問弁護士、会計士、パートタイム職員報酬	
2 管理費	188,132	管理用消耗品他管理経費	
3 事業費	234,765		
内 訳	謝礼金	19,600	通訳謝礼他
	消耗品費	37,956	日本語教室・イベント用消耗品
	印刷製本費	4,044	イベントポスター他
	会議費	58,522	イベント協力者賄他
	通信・交通費	59,481	郵便料、電車・タクシー代他
	什器備品購入費	36,413	パソコンソフト他
	雑費	18,749	ホール使用料、広告費
計 (B)	2,262,629		

## 日本武蔵野センター活動状況

		内 容	参加者等
1	日本語教室	初級クラス( 3 ) 継続初級クラス( 3 ) 中級クラス( 1 ) 上級クラス( 2 ) 漢字クラスを設置。 週 1 回、2 時間。平日の午後・夜間に開講。	初級クラス定員 20 ~ 30 人。 他クラス 定員 5 ~ 10 人。 約 100 人が受講。
2	図書館利用	図書、音響、映像など約 1300 点所蔵。 館内での閲覧、貸し出しサービスを実施。	毎月 200 ~ 250 人の利用あり。
3	カルチャー・クラス	書道クラス( 初級・中級、週 1 回 ) 漫画クラス( 2 クラス、週 1 回 ) 切り絵クラス、絵手紙クラス、着物着付けクラス( 年 2 回 ) 茶の湯クラス( 月 2 回 ) など。	各クラス 5 ~ 10 人。
4	イベント	ひな祭り、七夕など季節のイベントを実施。	各回 50 人程度
5	ブラショフ市の事業への参加	「ブラショフ・デー」や「Book & Music フェア」等のイベントに合わせ、着物ショーや写真展、書籍などの展示、日本文化紹介イベントを実施。	
6	ブカレスト大学との協働、地域活動	ブカレスト大学での書道指導、ブカレスト大学からの茶道講師受入。地域のホスピス訪問など。	
7	日本に関する情報提供	日本および武蔵野市に関する情報、日本の奨学金情報などを提供。	
8	広報活動	テレビ、ラジオ等に出演してセンターを P R。 センターのホームページ作成 ( 日本語、英語、ルーマニア語 ) <a href="http://www.musashino.ro/">http://www.musashino.ro/</a>	
9	I T センター	ブラショフ市が主催し、パソコン教室を開催。	年 3 コース程度 各コース 10 人 × 20 回

No.	質問内容										無効	回答数
	項目1	回答数	項目2	回答数	項目3	回答数	項目4	回答数	項目5	回答数		
Q1	現在参加している活動は？											
	日本語 class	117	図書館利用	27	書道	11	茶道	5	その他	20		5
Q2	これまでに参加した活動は？										参加したい	18
	日本語 class	29	図書館利用	7	書道	12	茶道	2	その他	21	新人には回答できなかった	60
Q3	武蔵野センターをどうして知りましたか？いつ頃から来ていますか？											7
	学校の友人	36	自分のネットワーク	85	県立図書館で	4	インターネット	3				13
	1-6ヶ月前	80	6m-1年前	17	2年以前	24						
Q4	あなたの家族や友達は、武蔵野センターを知っていますか？											
	はい	86	いいえ	2	ある人達は	45						
Q4-2	ご家族や友人は武蔵野センターがNPOであることを知っていますか？											
	はい	101	いいえ	33								
Q5	現在の活動以外に参加したいプログラムがありますか？											
	活け花	15	折り紙	13	料理	3	映画	4	その他	39	新しい人達がまだ多くよく解らない	78
Q6	どのくらいの頻度で武蔵野センターを利用していますか？											
	ほぼ毎日	12	週1回	96	週2回	22	不定期	4				
Q7	センターに来る目的は？日本語クラス、図書館、情報、インターネット利用など											
	日本語クラス	117	図書館利用	72	友達に会う	2	イベントおよびカルチャークラスなど	26	情報(含、インターネット)	34		
Q8	武蔵野センタの場所、開館時間はあなたにとって便利ですか？											
	場所：良い	129	場所：不便	3	場所：見つけにくい	2						
	開館時間：良い	123	開館時間：不便	6	開館時間：不満	4						1
Q9	武蔵野センターの活動で嫌いなものは？											
	特になし	105	No.2		No.3						新人はまだなかが解らない	10
Q10	武蔵野センターのどんな所が好きですか？											
	日本の情報	16	日本語でコミュニケーション	50	イベントや図書館が利用できる	27	無料サービス	10	スタッフや雰囲気	12		
Q11	将来日本に行ってみたいですか？											
	勿論	122	いいえ	8								4
	奨学生	41	結婚	3	仕事関連	29	観光	100	その他	4		8
Q12	受益者負担をどう思いますか？賛成の方でどのくらいなら負担できますか？											
	賛成	73	反対	8							受益者負担の概念が解らない	53
	10レイ以下	11	10-20レイ	21	20レイ以上	8					no idea	94
Q13	あなたは、課税総額の2%を指定のNPOに寄付できる新しい優遇税制をご存じですか？											
	はい	85	いいえ	43							新法が解らない人がいる	6
Q14	あなたは、自分の税金の中から、または知り合いに頼んで、この優遇税制を使ってNPO武蔵野センターに寄付したいと思いませんか？											
	はい	81	いいえ	11	どちらともいえない	29					新法が解らない人がいる	13
Q15	あなたは、時間、アイデア、ボランティア活動、本、材料、などを武蔵野センターに提供し、或いは試合を紹介したりして、この施設絵を支えたいと思いませんか？											
	強く思う	70	そうしたい	57	全然思わない	0						7

注) 今回のアンケートでは、この1月からセンターの日本語初級に関わった人達が沢山あり、まだセンターの活動の全容が解らない人々含まれます。ITセンターは、時間切れで調査から除外しました。調査実施時期：2006年3月。調査者総数：134人。

## ルーマニアとの交流に関する市民意見

番号	市民意見	市の考え方	市民懇談会での意見
No.1 1/16 電話	HPの会議要録に、発言委員名が書かれていない。責任をはっきりさせるため、明記すべきである。	市では従来から、委員の方に自由に発言してもらうため、進行役以外の委員の名前は載せていないことが多いが、懇談会で諮って決めたい。	1. 会議要録は全文速記ではなく、事務局でまとめた要録である。発言委員名を載せるのであれば、発言者の確認・調整が必要となり、公表までに時間もかかる。 2. 発言委員名を記載すると、発言に慎重になり、活発な議論にならない心配がある。自由に発言したいので委員名は載せない方がいい。
No. 2 2/20 はがき	市から派遣された駐在員の方々の意見をよく聞いて欲しい。 市がやっていることと民間団体（武蔵野ブラショフ市民の会など）が行っている事がブラショフの方に理解されるように。 民間団体がやるのであれば税金を使うのをゼロに。 ブラショフの方々に喜ばれる交流であってほしい	駐在員とは日頃からメール等を利用し、連絡を密にしている。また、この懇談会には、前所長に委員として参加していただいている。 市の実施事業と民間団体の実施事業が混同されないように、分かりやすいPRに努める。幅広い交流を推進するためには、民間団体と市との協働も重要と考える。	市の考え方について特に異論はない。
No. 3 2/24 電話	交流プログラムは、こちらの考えを押し付けるのではなく、ルーマニアの国民性を理解した上で、ブラショフの人々が希望しているものを続けることが大切である。 例えば、招聘プログラムを終えて帰国後、「予定がずっと詰まっていた、山に行きたかったのに行けなかった」などの不満が出るので、計画段階で十分に要望を聞くようにした	交流の相手方の事情、もの考え方等を理解するよう努めることは、非常に重要である。今後とも、市がルーマニアの人たちを対象とした事業を企画する際には、日本武蔵野センター等を通じ事前に十分な現地事情の把握に努める。 市民同士の交流を推進するための支援を工夫する必要があると考えるが、活動の自主	市の考え方について特に異論はないが、現在招聘事業を実施している市民団体に所属する委員から、「招聘側としても、スケジュール作成には非常に苦労している。要望を聞くようにしているが、目的に沿ったプログラムにしたいので、要望どおりいかないこともある。」という発言があった。

	<p>方がいい。</p> <p>交流は市民の力を活かしたやり方で進めてほしい。市民が行っている交流に対して経済的な補助があればもっとよいのでは。</p>	<p>性を尊重し、経済的補助については慎重に考えたい。</p>	
<p>No. 4</p> <p>2/28</p> <p>文書</p>	<p>ブラショフ市の日本武蔵野センターは今後とも存続した方がいい。</p> <p>センター長の派遣については、諸経費の面から、必要ない。現地の人で可。</p> <p>ルーマニアの学生等を数ヶ月間来日させ、武蔵野市役所で交流事務を覚えてもらう研修制度をつくり、人材育成を。</p> <p>日本語教師の派遣は必要ない。JICAの仕事だと思う。</p> <p>日本武蔵野センターは、日本文化を紹介するため誰でも利用できるように。</p>	<p>ブラショフ市民と武蔵野市民の交流の拠点として、重要な役割があると考えます。</p> <p>センター所長は単にセンターの運営管理だけでなく、ブラショフ市との交流の窓口になっている。また、センターの施設管理の面からも、センター所長の派遣は必要と考えている。</p> <p>人材育成は非常に重要だと考えるが、既に市民団体による研修生招聘制度もあるので、市が直接行うことについては、慎重に検討したい。</p> <p>ブラショフ市の意向を受け、日本語教育支援を軸とした文化交流を行うことを目的にセンターを設置しており、その基本的活動である日本語教室は市が責任をもって実施する必要があると考える。ルーマニアがEU加盟(2007年の予定)後は、JICA(国際協力機構)の職員派遣は難しいと言われている。</p> <p>ブラショフ市民に日本文化を紹介する場として、多くの人に利用してもらいたい。</p>	<p>全会一致ではないが、次のような意見があった。</p> <p>スタート時は、基本協定に基づきブラショフ市が管理・運営を行っていたが、うまくいかなかったので駐在員を派遣した経緯がある。現地に適任者がいれば現地の人の方がふさわしいが、現在のところ日本からの派遣でやむを得ない。</p> <p>JICAには日本語教師という枠はない。現地のルーマニア人や現地に駐在している日本人が教えるということも考えられるが、日本語を教えるためには指導者としてのスキルが必要で、現状では適任者がいないので日本語教師の派遣を続ける必要がある。</p>
<p>No. 5</p> <p>3/1</p> <p>文書</p>	<p>今後継続して交流ができるように、今、見直しが必要だと思う。</p> <p>2月28日に委員から提案さ</p>	<p>この市民懇談会の報告書やセンターを実際に利用しているブラショフ市民の声、ブラショフ市側の交流担当者の意</p>	<p>については、特に異論はない。</p> <p>の事務局新設に関しては今回も意見が分かれた。</p>

	<p>れた事務局新設も必要ではないか。</p> <p>日本語教師の現地化や、センターの家賃の負担も、検討が必要だと思う。</p>	<p>見等を踏まえ、必要な見直しを行う。</p> <p>事務局新設には、懇談会委員の中でも、賛否両方の意見があった。市としては、市民への情報提供、市民参加のイベントの開催等、懇談会で同意された事項について、積極的に取り組みたい。</p> <p>ブラショフ市の意向を受け、日本語教育支援を軸とした文化交流を行うことを目的にセンターを設置しており、その基本的活動である日本語教室は市が責任をもって実施する必要があると考える。</p> <p>センターの家賃は武蔵野市が負担しているが、ブラショフ市側もセンター職員の宿舍提供、センターの光熱費・電話料など一定の負担をしており、現時点では家賃の負担を求めることは難しい。</p>	<p>(賛成) ルーマニアとの交流の意義を市民に理解してもらい、交流を広げるためにも、ネットワークの核としての事務局の設置が必要。市の担当者が十分な現地情報を持っているわけではないので、ルーマニアのことを知っている人たちのネットワークは市のサポート部隊としても機能するのではないかと。</p> <p>(反対) 新しい組織を作る必要はなく、必要な時に、市が呼びかけてネットワークをつくり、市民団体は、独自に活動しながら、市が企画した市民参加のイベントに協力するという形がよい。</p> <p>ブラショフ市の負担に関しては、現在も月 10 万円程度に換算できる負担をしていると思われるので、これ以上の負担は求められない。ただし、現在のセンターの賃貸借契約が 2008 年に切れるので、その時期にあわせ、ブラショフ市所有建物の再活用を求めたり、センターが現地法人として建物を購入することなども検討すべきである。</p>
<p>No. 6</p> <p>3/10</p> <p>Email</p>	<p>今後も交流を続けてほしい。</p> <p>一自治体が、経済抜きの文化交流を進めてきたことには、大いに意義があった。しかし、現地にセンターができてから、現地の情報が市民に伝わってこなくなった。</p> <p>馴染みのなかった東欧の国</p>	<p>交流を続けていく意義があると認識している。</p> <p>市民への PR が十分ではなかったため、今後は、現地の情報を市民の方に伝える工夫をしていきたい。</p> <p>日本語研修生の招聘事業は、市民団体の独自性を尊重してきたが、人材育成や相互</p>	<p>今後の交流のあり方を考えると、現在は、援助・支援的な交流であるが、将来的には、対等な相互交流を目指すべきである。ブラショフ市民も、センターを支えたり、協力したいという気持ちがあると思われるので、新しい対等の方向性に進む関係づくりの一步</p>

<p>に拠点ができたので、スタッフ派遣を有効に機能させたら、もったいない費用ではない。こちら側の受入を市民の会に丸投げしているように見えるが、民間グループで全て受け持つのは限界があるのでは。</p> <p>ルーマニアからの発信も欲しい。日本語を学んでいる人がいるのだから、その熱意が市民に届くよう工夫して欲しい。双方からの発信があつてこそ、「交流」といえる。</p> <p>子供達の交流ができないか。子供達の交流により、今までの投資が将来に向かって花開く。</p> <p>日本の外務省や在日ルーマニア大使館で交流がよく知られている。無形の財産が形成されている。</p> <p>市の事業として無理があるならば、NPO として存続させ、資金調達の道を広げ、市民に PR し、市がバックアップしてはどうか。</p> <p>10 年育ててきた事業であり、市民や地方自治体が世界に直接つながっていくという形は今後ますます増えていくと思うので、大切に考えて上手に活用し、市民にとっての世界への窓口の一つにしてほしい。</p>	<p>交流の重要性を考慮し、市が主体となつて行う招聘制度の創設や招聘団体への支援策についても検討していきたい。</p> <p>懇談会でも同様の意見がでている。意見の趣旨に沿つて、具体的な方策を研究したい。</p> <p>外務省や在日ルーマニア大使館から高く評価していただいていると認識している。</p> <p>交流を進めていくにあつては市民や市民団体との協働が必要であると考えているが、具体的な方法は、今後よく研究したい。</p> <p>市民にも成果が感じられる交流となるような仕組みづくりが重要だと考えている。</p>	<p>として、日本語教室を有料化（資料代の徴収）の検討をしてはどうか。</p>
--	--	---



第1回ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会 会議要録

日 時：平成17年12月15日(木) 午後7時～8時30分

場 所：武蔵野市役所8階 804会議室

**1 開会**

**2 委嘱状交付**

**3 市長挨拶**

【邑上市長】これまで本市は、ルーマニア国ブラショフ市と交流を続けてきた経緯がある。私自身はいろいろなまちづくりへの協力を仕事にしてきたので、勉強のためヨーロッパにも数回行っているが、ルーマニアには行ったことがない。今回の懇談会では、今までの交流の評価をもらい、今後どのような交流のあり方が可能なのか、ざっくばらんに議論し提案をしていただきたい。その提案を基に今後の交流の進め方を検討していき、市民相互の交流に発展させていきたい。今までの経験をどう活かすのか、期間が短いが集中的に議論し、まとめてもらいたい。

**4 委員自己紹介・事務局紹介**

**5 懇談会設置要綱等説明**

<懇談会設置要綱説明>

【委員】今回、ブラショフ市との交流に限って懇談会を行う理由はあるのか。

【事務局】前市長の頃から、市民が参加できる交流を考えたいという課題があった。アメリカ合衆国ラボック市、中国との交流に関しても同じ課題があるが、ルーマニア国ブラショフ市は、現地に日本武蔵野センターという施設も設置しているので、重点的に考える必要がある。

**6 委員長の互選と副委員長の指名について**

【委員】横尾委員は広く活動をされている経験がある。横尾委員が適任ではないか。

<全委員一致で横尾委員に決定>

【委員長】私は交流に関わった団体の関係者であるので、副委員長は団体代表でない河北委員にお願いしたい。

**7 ルーマニアとの交流の経緯、日本武蔵野センター活動状況説明**

<資料説明>

**8 質疑**

【委員】資料中の日本語教室約100名受講とは延べ人数なのか。

【委員】以前、日本武蔵野センターの所長をしていたので、この質問には私から回答する。100名は学習者数である。日本語を学んでも就職には直結しないが、ルーマニア人は知的好奇心が非常に強く、いろいろな言語を学びたいという人は多い。この日本語教室はすべて無料にしており、そのメリットがある一方で、途中でやめる人が少なくないということがあった。受講者はほとんど大学生である。

【委員】図書室の本は日本のものか。

【委員】英語のものが多く、日本語のものもある。

【委員】HPはあるのか。また、アクセスした人の数がカウントできるようになっているか。あ

れば全世界でどれほどの人々が見ているかわかる。

【委員】HPは作成してある。カウントできるようにはなっていない。

【委員】ルーマニアから何人くらいの人が本市に来ているのか。

【委員】ビザの取得が非常に難しいため、ルーマニア人が外国に旅行するのは非常に困難だ。

【事務局】本市には3名在住している。その他、多摩地域には多くの大学があるので、留学生等は大勢いるのではないか。

## 9 今後の進め方

【事務局】会議の公開について、基本的に公開としたい。HPでもどんな内容であったのか公開したい。また、市民意見の聴取方法であるが、HP・市報にて意見募集をし、いただいた意見は会議で報告し、委員のコメントをつけて、それをHPで公開したいがいかがか。

【委員】会議公開について、傍聴者の発言権はあるのか。

【事務局】委員から傍聴者の意見を聞くこともできるが、基本的には、傍聴のみとしたい。

## 第2回ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会 会議要録

日 時：平成 18 年 1 月 17 日（火） 午後 7 時～ 8 時 30 分

場 所：総合体育館 3 階 視聴覚室

### 1 資料説明

#### 2 議事：「これまでの交流の評価について」

【委員長】今後の交流のあり方を考える上において、これまでの交流の評価について意見交換したい。

【委員】前回の資料において国際交流の記載がいろいろあったが、アメリカ合衆国ラボック市や中国との交流評価についてもこのような検討をしたのか。

【事務局】国際交流施策検討懇談会にて、市の行っている交流の全体の評価を学識経験者に検討をしていただいたが、ラボック市、中国との個別の交流について、その報告書の内容以上につこんだ評価はしていない。第四期基本構想・長期計画にも簡単な記載はあるが、個別の具体的な評価はない。

【委員】日本語クラス参加者数の資料をみて、モチベーションを高めることが重要であると感じた。学習してよかったと思えば、人を連れてくると思う。また、外国語を学ぶ上で、人との結びつきが大切なので、文通などがあればいいと思う。

【委員】今までの市からの報告は、一方的なものが多かったように思う。日本語教室に参加したルーマニア人の声がない。日本語教室の参加者がなぜ減ったのか、辞めてしまう人は大人なのか子どもなのか、直接声を聞くことが大切だ。私は、北欧に旅行した時、日本の漫画で片言の日本語を覚えた子どもに会った経験があり、若い人の力を思い知らされた。各クラスにおいて現場の声を探ることが大切ではないか。そういうことをリサーチしてはいかがか。

【委員】日本語クラスの参加者は、社会人もいるがほとんどが大学生、そして女性だ。平均 20 歳くらいだったと思う。だから小学生はほとんどいない。モチベーションについては、東南アジアやアメリカなどとは違う。ルーマニアにおいては、日本語を学んだところで就職につながるわけではない。なぜ学ぶのかは、好奇心があるからだ。特にルーマニアでは漫画がない。日本の漫画はルーマニアだけでなく、世界中で人気があり、ブラショフの日本武蔵野センターにも漫画教室があった。日本語教室の生徒が減っていく理由は、ついていけなくなったり、関心がなくなったり、大学の授業の関係で時間が合わなくなったというのが多い。多くは黙って辞めていく。無料なので、生徒にとって辞めても痛手はない。

ルーマニアとの交流の評価については、切り口をはっきりさせ、連続性を持たせる必要がある。

「日本武蔵野センターの機能・役割」「市民参加のプログラムという両国の交流」「日本語教室の成果」「経費は適切か」等の切り口が考えられる。

【委員】ルーマニア人が日本語を勉強するのは逆に、武蔵野市の人々がブラショフに関心を持てるような企画は考えられないか。例えば、武蔵野自由大学で社会人や主婦をターゲットにしたような取り組みはできないか。ルーマニアの家庭料理について学んだり、武蔵野市が力を入れている保育についてルーマニア人と情報交換、市民の交流の接点にすることはできないか。また、2007 年の武蔵野市制 60 周年にあわせて、イベントを行うのもいいのではないか。日本

にあるルーマニア政府観光局をもっと活用してはどうか。

【委員】資料をみる限り、ルーマニアブラショフ市での日本語教室の礎はしっかりできたと評価できるのではないかと。その意味では、当初の課題は解決できたと思う。学習者の減少については、初級クラスが減っているが、初級者は途中で減るものなので、この減少率は問題ではないと思う。ただ、この10年間の武蔵野市からの経費はとて大きいものがある。それは、大いに効果を出したと思うが、これからは支援ばかりでなく、ある程度の受益者負担も考えてもいいのではないかと。日本語教室の修了者のネットワークをつくって活用すべきでないか。日本武蔵野センターなどで修了者の力をもっと使うべきである。また、武蔵野市民にルーマニアへの理解を深めてもらい、市民が楽しめる交流を作り上げる必要がある。

【委員】ブラショフでは、日本武蔵野センターの認知度は低い。一部の裕福な家庭はともかく、一般の人々が夕方に日本語教室の授業を受ける余裕はない。受益者負担をどうするかについては悩んだが、ルーマニアの経済状況を考えて、導入しなかった。修了者のネットワークをつくることについては、若者は大学を卒業すると職を求めて都会や海外へ行ってしまおうので、難しい面がある。

【委員】日本語教室を受講するにあたっては、受けたいと思う人の動機があるはずである。入学者に動機は聞いているのか。

【委員】当時はとっていた。

【委員】市民にとってもルーマニアという未知の国と本市が交流しているのは、興味深いはずだ。今から交流を通じてルーマニア人と人的なグループをつくっておけば、将来の交流に有効にアレンジしていくと思う。本市の市民に向けては、マスコミを利用したり、デパートでのルーマニアフェアの開催などを通して、うまくPRしていけば、ルーマニアは市民から見ても魅力ある国、街だと思う。

【委員】本市が企画したルーマニア料理教室に参加したことがあるが、何かを見るだけでなく、参加したことがとても良かった。

【委員】料理教室というイベントはとてもいいと思うが、その後の広がりがない。ラボック市との交流のように、感受性の豊かな思春期の子ども達の交流はできないか。子ども達が大人になっていくことで、広がりが出てくる。

【委員】ルーマニアの料理教室においても、招聘プログラムで来日されたルーマニア人の講師や日本武蔵野センターの職員、武蔵野ブラショフ市民の会との出会いがあり、交流に広がりがあったと思う。

【委員】持続可能な交流が大切だと思う。イベントというのは、経費の割りにあまり効果がない。例えば、本市とブラショフ市の母親が保育のノウハウを共有するといった、何かの時にまた会いたいと思うような人間的つながりになるものもいいと思う。その意味で、青少年の交流はいいと思う。

【委員】アメリカのラボック、ロシアのハバロフスクには青少年の交流があるが、ルーマニアにはなぜないのかというと、お金がないからだと思う。ルーマニアから日本への飛行機代だけでも厳しい。経済的なハンディキャップがかなりある。

【委員】日本に来なくても、日本の青少年がルーマニアに行くだけでもいいと思う。

【委員】ルーマニアでのホームステイは可能なのか。

- 【委員】一般の家庭において、受け入れることが出来るかどうかはわからない。
- 【委員】武蔵野市からブラショフ訪問はないのか。
- 【事務局】平成5年、7年、10年、14年に市民団を派遣した。
- 【委員】武蔵野市の補助で派遣しているのか。
- 【事務局】一部補助しているが、基本的に参加費は負担してもらっている。
- 【委員】日本語クラス参加者数の資料について、101から103のクラスはどんな違いがあるのか。
- 【委員】101は初めて日本語を学ぶ人のクラス、102は2年目の学習者というように分けている。
- 初級クラスの減少率の高さについてだが、武蔵野市にある国際交流協会の日本語教室の減少率と比較するとかなり高い。これは、国際交流協会では、本市に住む外国人が生活のために日本語を学ぶという姿勢である一方、ルーマニアでは、興味本位で日本語教室に参加しているからではないか。
- 【委員】以前、ブラショフで日本の高校生と交流したいという希望があったにも関わらず、日本側の協力校がなく、実現しなかったことがあった。当時は、日本の学校では海外との交流事業に協力する余裕はなく、インターネットなどのセキュリティーにも不安を抱いていたが、今なら交流する余裕があるのではないか。
- 【委員】以前、海外にて現地の人間と文通をしながら旅行することがあった。文通を通して旅行すると、普通に旅行するのとは刺激が違う。青少年にも文通をしてほしいし、そういう場をつくってほしい。
- 【委員】ネットを利用した公開授業などいいのではないか。
- 【委員】ルーマニアでは、パソコンの普及率は低いと思われる。
- 【委員】日本武蔵野センターが、武蔵野市内の大学への留学の窓口になるのはどうか。奨学金などを出すのもいいと思う。
- 【委員】ルーマニアとの交流に関しては、今まで武蔵野市民に知ってもらおう事業が少なかったように思う。
- 【委員】ルーマニアとの交流をどのくらい知っているのか、市民にアンケートを取るのはどうか。
- 【委員】市民団に参加した人たちが何かできないか。常に新しいメンバーが入ってくるような、そういう武蔵野市民の集いが必要だ。
- 【委員】ルーマニアを観光する日本人はどれくらいいるのか。
- 【委員】少ないが、日本人観光客を見たことはある。
- 【委員】ブラショフへの旅行者が、センター活動に飛び入り参加できるといい。また、センターで旅行者に宿等の情報提供ができないか。
- 【委員】武蔵野ブラショフ市民の会とはどのような組織なのか。
- 【委員】ルーマニア国立ジョルジュ・ディマ交響楽団をはじめに受け入れ、その後、毎年交流している組織だ。武蔵野市内でルーマニア語教室も開いている。
- 【委員】ルーマニア人の体操選手、コマネチによる体操教室など開くのもいいと思う。
- 【委員】ルーマニア大使館は、武蔵野市のこうした活動を知っているのか。
- 【事務局】当然知っている。たまたまではあるが、本日もルーマニア大使が武蔵野市長を訪問して、交流についての話をした。

### 第3回ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会 会議要録

日 時：平成 18 年 1 月 31 日（火） 午後 7 時～ 8 時 30 分

場 所：総合体育館 3 階 視聴覚室

#### 1 配布資料説明

#### 2 議事：「これまでの交流の評価について」

【委員】今まで 10 年経って、人との交流が続いていること、日本語教室も当初 6～70 名から始まったが、今では応募者 280 名まで広がった。特にルーマニアサイドにおいては、当初の目的を達成したのではないか。これからは武蔵野市の市民にとってルーマニアと交流することの利点を市民にわかりやすく伝える必要があるのではないか。前回の懇談会で、ルーマニアの経済状況から人の行き来が困難であるとあったが、そこまでとはいわないまでも、インターネットを通じて学校間の交流、若い人や若いお母さん達の交流が若い世代の交流が発展していけばいいと思う。

【委員】評価をするにあたっては、切り口を決めていかないとまとまりにくいと思う。いくつか発表したい。まず、1 番目として日本語教室についてであるが、95 年に国際交流協会の夏の教室から始まり 10 年間の実績がある。結果として現地の日本大使館の弁論大会に毎年エントリーしていて、良い成績を収めている。これも過去の積み重ね、実績だと思う。教師に関しても、最初は国際交流協会の日本語交流員、そして JICA 職員、今では市から派遣し、より完全になった。クラスに関しても非常に充実してきていると思う。2 番目に交流という面がある。10 年以上にわたり、市民団の交流、オーケストラ・合唱団などの招聘や派遣があった。この実績も評価できる。3 番目に日本武蔵野センターのアクティビティー（活動）について。メインは日本語教室だが、書道・絵手紙・切り絵・着物の着付けなどいろいろな日本文化紹介をしていた。ホスピスに週 1 回出向いて、ソロバンや折り紙をやったり日本料理を振舞ったこともある。茶道教室もボカレスト大学の協力を得てやっている。日本文化は奥が深いのでいろいろやってみる。4 番目に PR。これは継続的にやっていく必要がある。1 回講演会をやったというのではなく、持続性が必要だと思う。5 番目に経費の問題。年間 7～800 万かかっている。これは日本武蔵野センターの家賃がほとんどを占めるが、昔の図書館の分館に比べるとかなり使いやすくなった。経費の負担については、ブラショフ市の負担をもう少し求めるかどうかは、武蔵野市の財力との違いから考えると、もう少し長い目で見ていかねばならない問題と思う。

【委員】前回、文通の必要性を申し上げた。若い人には、言葉だけ学んでもモチベーションが上がらない。ネットで写真付きの自己紹介、プロフィールを掲載して、日本の学生に見てもらい、個人的に交流してもらおう架け橋となる仕組みが必要。ルーマニア人は英語がよくできるので、英語で交流できる。英語が母国語でない東欧圏との交流は意味がある。モチベーションは人と話してみたいことで上がる。話すきっかけ、第 1 歩としてネット、メール等で交流に役立てればよいと思う。

【委員長】実際には、どのようにやるのか。

【委員】日本武蔵野センターのホームページに（文通希望者の）プロフィールを載せるのはどうか。

【委員】ルーマニアは日本にとってあまり知られていない。互いに知られていない中、少ない予算の中で良くやってきたと思う。しかし、武蔵野市民に対して、これだけいろいろな活動をやっているという広報が十分であったか。もう少し広報があってもいいのではないか。なるべく広がりのある持続的につながっていくものがよい。PCの普及率はあまり高くないが、徐々に広がっていくと思うからメールは良いと思う。そうした個人的なつながりができていくのは良いのではないか。

【委員】若い人は吸収力があるので若い人にターゲットを絞る。若い母親たちに日本の子育てとブラショフの子育ての違いや共通点について交流してもらおう。市内の「0123」や「あそべえ」でブラショフの紹介をする。小さいうちから情報を受けていればもっと興味を持てるのではないか。学校の教室を離れた場所で多くの言語を学ぶチャンスを与えられないか。

【委員】「あそべえ」とは何か。

【委員】各学校にある、地域子ども館である。子ども達の放課後対策として子ども達の居場所作り、いろんな年齢の子どもとの交流場である。いくつかの館に提案するのはどうか。

【委員】ルーマニアから日本に来るのは、経済的な問題だけでなく、ビザがなかなか下りないという問題もある。国際交流協会の研修生招聘制度がなくなった後、ルーマニア人の日本語学習へのモチベーションが下がったので、武蔵野ブラショフ市民の会で研修生を招聘することにした。

また、武蔵野市の中でルーマニアとの交流を広めたり、関心度を高めるのもなかなか難しい。研修生を招聘する時は、必ず市報にホームステイのお願いをしているが、受け入れ家庭を見つけるのも難しい。今までシンポジウムやルーマニア料理教室など行い、一般の方に知ってもらうようにしているが、いま一つである。また、ルーマニア語講座もずっとやっている。ブラショフの人が日本を見るのと日本の人がブラショフを見るのでは、温度差を感じる。

「0123施設」や「あそべえ」などを利用した若い人たちに広がりを持てるような、興味をもってもらえるようなプログラムを考えていきたい。またルーマニア人とのネットワークを考えている。10年以上活動を続けてきたので、それなりの広がりはあると思う。

【委員】武蔵野ブラショフ市民の会は独自の活動を行っているのか。

【委員】NGOなので独立してやっている。国際交流協会だけでなく民間の組織もあった方がいいとの事で設立された。研修生を呼ぶ際には、日本武蔵野センターにもいろいろご協力をいただいている。招聘の予算も独自に組んでいる。

【委員長】これまでのまとめを含めて事務局では交流の評価をどう考えているか。

【事務局】まだメモ的なものであるが、議論の参考としていくつかの切り口を申し上げたい。ただ、皆さんの議論が市の評価に引きずられることのないようお願いしたい。

【委員】ルーマニア大使館は、武蔵野市の評価をとても高くしている。Y市（神奈川県）もルーマニアの都市と交流しているが、評価は武蔵野市の方が高い。

【委員】Y市もルーマニアと交流しているので、Y市がうまくいったことや逆にうまくいかなかったことなどは、参考になるのではないかと思う。日本武蔵野センターについては、平成17年度の予算を見て、すごく経費がかかっていると感じた。その点が、他の交流、ハバロフスクやラボックと比べてどうなのか。日本武蔵野センターをつくった意義、職員派遣の意義はどうか。予算のかなりの部分は、日本武蔵野センターの家賃と人件費になっている。ルーマニア側

の負担も考えるべきではないか。経済的に厳しいのは分かったが、すべて武蔵野市の負担でやっていいものなのか。また、日本武蔵野センターのPRについては、もっと拡大すべきである。外務省のHPにリンクさせることはできないか。ルーマニアとの交流においては、日本武蔵野センターでの日本語教室が交流の中核であるとわかったが、ハバロフスクやラボックとの交流の中核は何か。

【事務局】予算は、ルーマニアが一番大きい。2番目はハバロフスクである。ハバロフスクとの交流予算は約1,500万であり、もともと野鳥交流がきっかけであるが、今は寒帯林保護など環境問題まで広がっている。3番目は、ラボック市との交流で、ジュニア交流団派遣に500万弱、ラボック市の中学生招聘に350万という内訳である。他には、中国との交流で高校生の派遣に百数十万、韓国との交流で派遣と受入合わせて400万くらい支出している。どの事業も中高生の青少年交流が中核となっている。韓国に関しては、大人の市民の派遣や市役所職員の相互派遣も行っている。

【委員】ルーマニア以外では今後につながる青少年交流が主であると感じた。

【委員】ブラショフにセンターがあるというのは非常に特徴的なことだと思う。

【委員】日本武蔵野センター来館者は、年間約7,000人で日本や武蔵野市の理解が促進されているということだが、武蔵野市側にも何か成果があるといいのだが。

【委員】ルーマニア側の負担として日本武蔵野センターに派遣されている職員への住居の提供があると聞いたが。

【委員】アパート代、光熱費代、センターの電話代、センターの清掃代はブラショフ市の負担であった。どのくらいかはわからない。

【委員】ブラショフ市側にも自立性をもたせる、自分たちも一緒にやるのだと提案していく必要があるのではないか。

【委員】少年少女合唱団とはなにか。

【委員】カメラータ少女合唱団を招聘した。音楽の文化的水準は高いと思う。

【事務局】1994年、平成6年のことだ。

【委員】バイオリニストやフルート奏者も来ている。50名とか大人数ではないが、招聘している。武蔵野の市民交響楽団も派遣された。

【委員】在日ロシア大使館の方から少年少女合唱団の声は素晴らしいと聞いた。武蔵野のイベントに合わせて呼んだらどうか。

【委員】日本語教室を始めた頃、ブラショフ市役所の職員との意思疎通が難しかったが、現在はどうか。

【事務局】今は、現地に派遣されている職員を通じて行っている。

【委員】利益を追求する企業と公益とは違うが、それ以上にルーマニア人と日本人は考え方など違うところがとても多い。しかし、そういうところも相手の国を知ることの一つであると思う。

【委員】以前、日本語教室の運営費がブラショフ市へ送られていた時代には、何に使われているのか不明で疑心暗鬼と感じるところがあった。日本武蔵野センターができ、日本人の常駐ができたことで、お金の流れがクリアになったのか。

【委員】今は、武蔵野市へ毎月、月報を送っている。

【委員】もともとは武蔵野市の希望でセンターをつくったのか。



- 【事務局】日本語教室は、視察に来たブラショフの市長が国際交流協会での日本語教室を見て、こうした教室を作ってほしいと言われたという記録がある。
- 【委員】本来であれば、日本武蔵野センターに対する責任は両者で分け合うはずと思う。
- 【委員】理想としては、日本に愛着のある現地の人間が、センター長や先生を行うような現地化がいいと思う。交流というものはとにかくお金がかかる。何かをすると必ずお金がかかるものである。どちらが負担するかの問題がでてくる。
- 【委員】ブラショフ市にとって日本武蔵野センターがあるのはどうなのか。
- 【委員】ブラショフ市は多くの友好都市をもっている。しかし、現地センターがあるのは武蔵野市だけだ。しかし、ブラショフで彼らがどのように評価しているのかわからない。
- 【委員】日本とルーマニアの国同士の貿易は増えているのか。
- 【事務局】一般的には急に増えたとか減ったとかいうことはないと思う。
- 【委員】武蔵野ブラショフ市民の会で行っているルーマニア語講座に来てくれている人も仕事でルーマニアに行くから学びたいという人が最近でできた。ルーマニア語講座が他にないからということだが、10年前に比べると広がりができたと感じる。
- 【委員】センターの運営でも支援というか運営委員会などは必要でないか。
- 【委員】丸一日中ははりついていなければならない仕事がある訳でないので、なんとかやっていた。
- 【委員】ルーマニアとの経済交流が少ないと思う。
- 【委員】外資もかなり入ってきているし、EU加盟も考えると変わってくるのでないか。
- 【委員】日本の自治体で東欧と交流しているところは少ない。そういう中で武蔵野市がブラショフとこうした交流をしていることは、非常に価値があると思う。外務省にもいい事を行っているということを伝えたい。
- 【委員】ビザがなかなかおりない話が出たが、最近では武蔵野ブラショフ市民の会の研修生ということならすぐ出るようになった。今まで継続して活動してきたから、継続は力なりと感じている。どうしたらもっと多くの武蔵野市民が我々の活動に来てもらえるのか。ムーバスの掲示板など利用しているが足りない。我々も何かもう少しポジティブに動いて、市にバックアップしてもらいたい。今回こんなに予算がかかっていると初めて知った。
- 【委員】武蔵野ブラショフ市民の会と市の交流事業課の関係がわからない。どっちが先か。
- 【委員】市が先に交流を始めた。その後、国際交流協会を補助する形で活動が始まった。一回目の市民団が帰国してきてから市民の会が独立した。国際交流協会から10万円の補助金をもらい、招聘事業をしている。
- 【委員】武蔵野ブラショフ市民の会は大変すばらしい活動をしているように感じる。このような活動を交流事業が生み出したとは必ずしも言えないが、大きな意味で交流事業の一翼を担っている。

## 第4回ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会 会議要録

日 時：平成18年2月28日（火） 午後7時～8時30分

場 所：総合体育館3階 視聴覚室

### 1 配布資料（懇談会での意見のまとめ）説明

#### 2 議事：「これまでの交流の評価」のまとめ

【委員長】今後も交流を続けるには、交流がどうあるべきか理念が必要と考える。その点を含めて各委員に意見を発表してもらいたい。

【委員】まず、武蔵野市側から見た魅力として、「縁」というものを大事にして文化の異なる人々との触れ合いから人間性を高められること、若者同士で将来に向けた人間交流ができること、年配者にとっては高度成長で日本が失ったものに対する価値観を思い出させること、日本武蔵野センターの日本語教室を通してルーマニア人の日本への理解を高めること、ルーマニア渡航者への便宜、東欧の国と交流をしている自治体が少ないことから、珍しい国際交流として市の魅力になることなどが考えられる。ブラショフ市側から見た魅力としては、東洋の先進国からの良い文化を学ぶことができる、日本語教室を通じて就業チャンスをつくること、ドネーションを得る、ビジネスチャンスをつくるなどが考えられる。今後の交流を続けていく理念としては、両市の市民にとって文化面・教育面・経済面で効果があること、両市民の国際的感覚を高めること、個々人の交流を通して人間性を高めること、若者を中心に情報技術を生かしたコミュニケーションなどが挙げられる。

【委員】武蔵野市側から見た魅力は、日本人が忘れてしまった懐かしさ（家族愛・おもてなし・女性らしさ・乾杯文化など）を思い出させ感性を共有させてくれること、歴史を感じさせられること、ルーマニアには手付かずの自然があること、日本人が親しみやすい野菜中心の食事に共感できること、中世の生活に触れられること、経済的な格差から少ないお金でたくさんの楽しみを得ることができること、支援できる喜びを感じられることなどがある。ブラショフ市側から見た魅力としては、俳句や墨絵など魅力的な伝統文化を知ることができること、世界経済や産業技術の先進国と交流できること、日本語知識の習得による就職チャンスや国外脱出の機会が生まれること、日本人の親切さに触れられることなどがある。今後の交流を続けていく理念としては、実績を無駄にしない時代に即した交流のあり方を模索した継続的な交流をすべきこと、民族間だけでなく男女それぞれの文化の違い等も含めた多文化共生社会実現を目指すこと、将来を担う青少年教育の実践の場として地球市民社会実現を目指すこと、双方に育った人材をもっと活用していくことが挙げられる。日本側の一方的な企画による交流ではなく、ブラショフ市民との対等な関係、双方が同じように関わっていく協働プロジェクトにしていく努力が必要。その人材開発、実践の場として日本武蔵野センターが機能していくと思う。そうすることで、武蔵野市の他都市との交流に対しての提案になることができるのではないかと。

【委員】武蔵野市側から見た魅力は、異国文化・習慣に触れる機会ができる、青少年交流に発展する可能性をもつこと、スポーツ交流や伝統（民族）音楽の交流の可能性があること、一番とつき易い食文化やドラキュラといった交流の題材があることである。ブラショフ市側から見た魅力としては、日本語を通じて日本企業に就職する機会や日本文化研究の機会が生まれるこ

と、ハイテク技術の習得の機会が得られること、ビジネスチャンス、EU加盟を前に経済関係の情報交換の機会が生まれることが挙げられる。今後の交流を続けていく理念としては、ドラキュラ研究会・勉強会をつくりルーマニアに興味をもたせること、ルーマニアのお土産・特産物を販売する催しを企画すること、ドラキュラの本や出版物の展示やルーマニア映画の上映会をすること、伝統楽器の音楽交流、伝統スポーツ紹介や練習、日本にない身近なものの紹介、ルーマニア料理教室の開催、絵本や地酒、郷土料理の紹介などが考えられる。

【委員】魅力については、他の委員と同じである。基本的には、異文化体験による感動や驚きである。異文化の度合いが非常に大きいので、失望も含めて、驚きや感動が大きいと思う。理念ということでは、異文化の交流を通じて相手国、人々を互いに知り合うべきである。それが世界平和にも寄与すると考える。

【委員長】ブラショフ市側から見る魅力についてはいかがか。

【委員】前回の懇談会配布資料のアンケートにもあるように、日本文化・国に関する関心というのがほとんどと考える。ビジネスチャンスというのは全体から見ると少ないと思う。ルーマニアにとって、日本は敗戦を経験した先進国ということで、関心が高いと思う。交流というのは非常に難しい。まったくイコールというわけにはいかないと思う。例えば、ルーマニアと日本では経済的に圧倒的な差がある。互いに青少年交流をしようという場合でも、アメリカのラボック市の青少年なら手を挙げる子どもは多いと思うが、ブラショフ市で青少年に公募しても集まるかどうかわからない。それだけ経済的なハンディキャップがある。

【委員】武蔵野市側から見た魅力については、我々が振り向いたことがなかった欧州の歴史ある国と知り合えた「縁」だと思う。武蔵野ブラショフ市民の会が学生を招聘しているが、招聘者の選考に困るくらいにブラショフでのチャンス・窓口を広げるような動きをつくっていきたい。未知の国を発見し知る喜び、そのチャンスを得ることができたというのが魅力であると思う。ブラショフ市から見た魅力については、ブラショフに行ったことがないので想像がつかない。多分、大多数の武蔵野市民がそうであると思う。ただ東洋の歴史ある国であり先進的な国である日本を知る機会ができたことは、ブラショフ市民にとって魅力だと思う。こらからの交流の理念としては、お互いがいろいろな面で高め合えていけるような交流をしていくべきだと思う。具体的なやり方としては、ブラショフ市で日本語教室に参加した人、武蔵野市で市民団としてブラショフへ行ったことのある人同士がもっと交流していくことだと思う。また、現在は、武蔵野市からの呼びかけでいろいろと交流しているが、今度はブラショフ市からの呼びかけで何かイベントが始められたらいいと考えている。

【委員】ブラショフ市と武蔵野市では差があまりにも激しい。武蔵野市側から見た魅力は、市民同士の交流・文化交流により相互理解が得られたこと、東欧のルーマニアという遠い国が近くに感じられたことにより世界観が変わったこと、若い人が東欧の文化に興味を持つきっかけになったこと、洗濯機募金や孤児院の支援等を通して国際援助という視野が多くの人に広がったことだと思う。ブラショフ市側から見た魅力としては、日本語学習の機会を得られたこと、日本文化を理解する活動に参加できること、ITセンターを利用できること、日本武蔵野センターという拠点が置かれていることによりいつでもそこが利用できることだと思う。日本武蔵野センターという拠点があることについては、すごい経費がかかってはいるが、興味のある時にブラショフ市民がいつでも訪れることができるという点で、すごくいいことだと思っている。

今後の交流の理念については、10年以上継続してきた活動により築いてきたものを継承発展する必要があるが、ブラショフ市民と武蔵野市民の関心度の大きな差をどうするのか考えていかなければならない。ブラショフ市民は日本文化に非常に興味をもっているが、武蔵野市民はルーマニア文化に同じように関心をもっているとは言えない。

【委員】ブラショフと交流をしていることを知らなかった若い人、市全体にPRを広げていきたい。武蔵野市側から見た魅力は、2、30年前に日本からなくなったものが残っていること。例えば、列車の厚紙切符、近くに行ったら話しかけるような触れあいなどが残っている。そうした経験を他の人も体験してほしい。ルーマニア側から見た魅力としては、日本は平和が長くて発展した国なので、先進国としてのモデルになることだと思う。今後の交流の理念としては、在日のルーマニア人と日本の学生がディスカッションし、若い人たちにアイデアを出してもらうことがいいのではないかと。ブラショフと友好都市であるということは、誇れることだと思う。ルーマニア人と話し合う機会を設けてほしい。

【委員】以前はコマネチやドラキュラのことでしかルーマニアを知らなかったが、みやこうせい写真集を見て、ルーマニアは非常に魅力的な多民族国家であるとわかった。武蔵野市側から見た魅力は、市だけでなく市民団体の活動により本当の意味での文化交流ができ、子どもたちにとってもいい財産になったと思う。ブラショフ市から見た魅力はわからない。今後の交流の理念としては、これまで10数年の貴重な経験を大事にして、交流を深め広げていくことが大切と考える。

【委員】これだけの予算をかけている交流なのだから、しっかり事務局を設置するのはどうか。武蔵野市の中にルーマニアとの交流事務局を設置する。事務局は市役所の交流事業課を中心に、今までルーマニアと関わってきた市内NPO団体や一般市民で構成し、ボランティア的に行うことを提案したい。活動は年4回ほど活動報告会を開き、結果は市報、HPに掲載していく。事務局の仕事は、日本武蔵野センターに関するもの、市民に対するもの、広報と大きく3つに分ける。日本武蔵野センターについては、年間計画の策定、予算・経費の把握と有効な活用の検討、日本語教室の現状把握と教師の現地化の検討、ブラショフ市との折衝について。次に市民に対するものとしては、市民参加のイベントがどうしたら具体化するのかの検討、市民の声が簡単に聞ける企画の検討、研修生招聘へのホームステイ斡旋、市民団経験者との交流について。広報については、外務省や在日ルーマニア大使館と情報交換・HPのリンク、ルーマニアとの文化交流の情報収集、ビジネスチャンス情報の提供など。以上3つのカテゴリーについて、市が中心となりNPO等が参加し、ボランティアとして運営していくことを提案する。

【委員】市民の中には、ブラショフがどこなのかわからない人も多い。ルーマニアをもっと市民に知ってもらう必要がある。年2回くらい在日ルーマニア人にガラクタ市を開いてもらい、集まった人にパンフレットを配ったりして、交流についてPRしていくのはどうか。何かとつきやすいもの、例えば食べ物などからPRにつなげていくのが効果的と考える。

【委員】武蔵野ブラショフ市民の会も青空市に出店し、ルーマニアとの交流をPRしている。会場の舞台上がって紹介もしているが、来場者は物を目的に来ているので、なかなかPRが伝わらない。国際交流協会の国際交流まつりでもルーマニア料理やルーマニアの小物の出店をしている。

【委員】ルーマニアとの交流事務局を設置するという意見には、個人的には否定的である。市の

交流事業課の仕事であると思うし、今の交流事業課の職員で十分できるかと考えている。

【委員】1992年の交流開始当時、かなり盛り上がったと聞いているがどうだったのか。

【委員】当時、ジョルディ・ディマ交響楽団の来訪にあたり、国際交流市民の会（MIC）やいろいろな企業、NGOから代表が集まり、その人たちで役割分担をし、ジョルディ・ディマ交響楽団50名の案内や通訳などを行った。ジョルディ・ディマ交響楽団の帰国後に、活動を引き継ぐ形で武蔵野ブラショフ市民の会を立ち上げた。当時は、ルーマニアはどんな国なのかかわからず、ゼロからのスタートということもあり、確かにすごい熱気があった。

【委員】その当時の熱気が戻ったことはあったのか。

【委員】その熱気が戻ったことはないと思う。その当時からだんだん人が減ってしまっている状況で、どうしたらもっと活動が広まっていくのか、武蔵野ブラショフ市民の会でも課題である。

【委員長】まとめについて他に意見はないか。

【委員】年間1,700万円もの予算が使われているが、現状に見合っているのか。どうしたら武蔵野市民にとって魅力のあるものにしていけるのか。これまで10年の交流をこれからも続けていくということで我々の意見は一致しているのだから、そのためにどんなことが必要とされているのかをまとめる必要がある。

【委員】市民交流をベースにすべきで、「公流」ではいけないと思う。市の指導のもとにやるのではなく、対等に話し合いながらやっていく必要がある。武蔵野ブラショフ市民の会などのNPOのように、自主的に活動していかなければならない。交流事務局案には賛成ではないが、市民参加のイベントを関係団体も一緒にやることは良いと考える。

【委員】年間1,700万円使われているが、市民参加のイベントには予算はあまり使われていない。

【委員】日本武蔵野センターがあまりにも狭く、使い勝手が悪いとのことで移転したが、地方自治体は海外に物件を保有できないため、逆に費用は高くつくがあえて借りているという経緯がある。人件費や家賃が予算のほとんどを占めるが、センターの運営を考慮すると仕方ないとも感じる。

【委員】市民の草の根交流は大切と思うが、武蔵野市民の中にブラショフ市との交流について知っている人が少ない。市民の交流だということを理解してもらうためには、日本武蔵野センターの運営に市民が参加することは、大変意味がある。

## 第5回ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会 会議要録

日 時：平成 18 年 3 月 14 日（火） 午後 7 時～ 8 時 30 分

場 所：総合体育館 3 階 大会議室

### 1 配布資料説明

### 2 議事

【委員長】本日配布された歴代のセンター駐在員と現地雇用職員の意見について、事前に副委員長に目を通してもらったので、副委員長から概要を説明する。

【副委員長】センターで行っている日本語教室や日本文化紹介活動、市民団による文化交流に関しては皆同様に良い評価である。今後のあり方については、武蔵野市民の理解や協力が必要、ITセンターのPCをもっと活用すべき等の意見がでていいる。立地条件については、あまり良くないという意見もあるが、センター利用者のアンケートには、良いという意見がほとんどである。交流全般に関する意見では、相互に対等の立場での交流を目指すべきだという意見がある。現地雇用職員からは、今後のあり方について、財源として、ルーマニアでの割り当て寄付制度（所得税の2%をNPOに割り当て寄付できる制度）をセンター利用者にもっと呼びかけてはどうかという意見や、現地の関係団体との協働による文化プログラムは、センターの寄付金へのきっかけになるとの意見があった。また、日本語講座受講者の留学事業の新設、文化・観光分野などでの日本の行政や関係団体との意見交換の場の設置、経済部門の交流、両国の作家がお互いの国のことを書き合うといった文化交流の提案があった。また、経済的理由で近隣国にも行くことのできない多くの市民にとって、武蔵野市の貢献は大変貴重である。研修生の招聘に関して、武蔵野ブラショフ市民の会との関係をさらに強化した方がよいとの意見があった。

【委員長】次に市民意見について、委員の意見を伺いたい。

【委員】市民意見の 4 の についてだが、配布資料の基本協定書（1998 年）第 4 項にもあるように、センターの設置当初、センターの管理・運営はブラショフ市が責任をもって管理することであった。しかし、うまく機能しなかったため、所長（当時は協力員）が派遣された。現状ではブラショフ市との覚書（2004 年）に基づいた実施要綱の第 4 項のとおり武蔵野市から所長を派遣している。現地の人間でしっかり管理してくれる人材がいるならいいのだが、なかなか実情は難しいと思う。両市で設立した施設でもあるので、所長の派遣は必要ではないかと思う。続いて についてだが、JICAの活動分野としては日本文化はあるが、日本語教師のカテゴリーはない。ブラショフ市から依頼されて日本語教室を行っている経緯もあるので、武蔵野市が責任をもって行わなければならないと思う。仮に現地のルーマニア人や、現地に住んでいる日本人の中に日本語指導のスキルをもった人がいれば、現地レベルの給与で行えば良いと思うが、当面はなかなか難しいのではないか。

【委員】実際にそうした人材を探したことはあるのか。

【委員】ない。しかし、現在日本語教師として派遣されている職員が、ルーマニア人の学生をアシスタントとして利用したことはある。授業をルーマニア語で行った方が理解しやすいためである。ボランティアとしたが、交通費ぐらいの支給はあったと思う。

- 【委員】現地に住んでいる日本人に日本語教師をお願いする場合、資格の有無はどうか。
- 【委員】やはり言葉というのはネイティブだから良いというわけでもない。例えば、市内のA大学では、資格を持った人にしか英語を教えさせない。最初に間違っただ知識をインプットされると、なかなか直らない。そういったことから、教える人にはある程度の資格が必要ではないか。
- 【委員】今後、現地化するのであれば考慮するべきだと思う。
- 【委員】現地の学生をボランティアとして活用するという事は、両市民でセンターをつくっていく「相互交流」ということから良いことだと思う。
- 【委員】そういった場合、どこまで仕事をお願いするか考える必要がある。基本的にはアシスタントとして、日本人とセットで行うことはいいことだと思う。
- 【委員】日本語教室を始めたとき、現地の人を日本語教師に育成する試みはしなかったか。
- 【委員】はじめは、3年間で現地の人を日本語教師化するという目標だったが、実際には難しかった。本人が日本語教師になりたいという気持ちがないとうまく育たない。彼らは、日本語教師というよりも他の仕事に日本語を利用したいと考えている人が多く、日本語教師という仕事が魅力的かどうかはわからない。
- 【委員】最近では日本人観光客も増えているので、通訳等の仕事も増えるのではないかと。また、日本語教師という仕事を他の仕事より高い報酬にすれば変わるのではないかと。センター長の経費の面も問題だが、現地に所長にふさわしい人はいるのか。お金がかかるから派遣をやめるというのでは、せっかく今まで機能してきたものがなくなってしまう。
- 【委員】お金の問題というよりは、適切な人間がいたら考えるということではないか。
- 【委員】確かにセンター長にはいろいろな要素が求められる。
- 【委員】センター長イコール日本人と固定する必要はないと思う。日本語教師についても同じである。ただ現状では、日本からの派遣もやむをえないと思う。
- 【委員長】続いて 5 の市民意見について議論したい。
- 【委員】 について、前回の懇談会で提案した事務局新設というのは、あくまでもボランティアで考えている。チェック機能ではなく、ルーマニア交流についてのサポートという意味である。
- 【委員】これまで、とても多くの経費が武蔵野市民の税金で賄われている中で、ブラショフ市民には恩恵があるが、武蔵野市民にはあまり知られていないし恩恵がない。そのような中で、新設する事務局が適切に機能していけるのか不安である。
- これまで10年以上も交流してきたが、市民にはあまり知られていない。墨田区にあるルーマニア観光局を利用してはどうか。タイアップして市民にPRをしていく。武蔵野市民にとってはブラショフ市という観光地を安心して旅行できることはメリットであるし、ブラショフ市にとっては、武蔵野市民が観光に訪れることで潤い、喜ぶと思う。そうした観光局を武蔵野市に置くことの方が、事務局を新設することよりも市民には喜ばれるのではないかと。
- また、日本語教師についてであるが、JICAが無理であるなら、しっかりとした人を日本語教師として派遣していく必要があると思う。
- 【委員】事務局を新設しても家賃等の経費がかかる。市役所の交流事業課の中で文通仲間の斡旋をし、現地と連絡を取り合うようなものなら賛成である。

- 【委員】事務局を新設するのであれば、もっとしっかりとしたものが必要だと思う。各団体から代表をボランティアで年4回集めるということで、どれほどの効果が望めるのか。武蔵野ブラシヨフ市民の会とのパイプ役にはなると思うが、市民に還元されるかというのは難しいと思う。市役所のほうで基本路線をしっかりとしないうちに事務局を新設しても難しいと思う。
- 【委員】若い人が自発的に交流に関われる場をつくることは、必要だと思う。
- 【委員】事務局という名はともかく、そうした交流のネットワークをつくるのは必要と考える。
- 【委員】事務局新設の提案もネットワークの核の一つだと思う。経済や文化交流ではなく、市民交流がメインのはずである。いろんな人が関わる核になるネットワークが必要。観光局や文通仲間の斡旋などを含めて、事務局というのは何らかのネットワークの核になると思う。
- 【委員】人を置いたり、何回か集まるということではなく、ネットワークを動かしていくルールが決まればよいと思うので、会合なしでインターネットにてやり取りすることでいいと思う。
- 【委員】今回いろいろな意見が出たが、今後どうしていくかは市役所の交流事業課任せではなく、事務局を新設し、いろんな集まった意見を集約し、今後の交流につなげていく、そうした原動力が必要だ。今は市が中心であるが、ボランティアを含めて市民のエネルギーの集合が必要だという思いがある。
- 【委員】市役所と現地のセンター所長で十分対応していけるのではないか。組織をたくさんつくる必要性はないと思う。
- 【委員】今の意見と同じで市役所で十分かと思う。市民が貴重な時間を割いて行うのは、無意味なのではないか。市民参加のイベントについては、武蔵野ブラシヨフ市民の会でもやってきている。ペンフレンドもいいと思うが、絵手紙の活動もずっと続いていて、新聞に記事が載ったこともある。NGOには、自由にさせてほしいという思いがある。国際交流協会や市の下部組織ではなく、独立した活動団体である。独自の活動をしたいと考えているので、そのような事務局が新設されても何ができるのか困ってしまうし、市民の会としてのメリットは感じられない。必要に応じ市に協力するが、独自の活動をするという今のスタイルのままでいい。
- 【委員】それぞれの活動団体でカラーが違うのは十分わかる。必要に応じて市に対し協力、独立していくということであり、無理に融合していく考えはないということだと理解している。
- 【委員】今までどおりに市民に広がるような活動をし、市から紹介を受ければ協力していきたいと考える。
- 【委員】懇談会であるので、賛否両論あって当然だ。
- 【委員】新しい組織をつくる必要はないと思う。いろいろな組織の独自の活動をつなげるネットワークで十分と考える。
- 【委員】センターの建物の賃貸借契約の契約期間は5年間で、2008年にきれるので、2008年が考え直すチャンスになると思う。経費についてだが、武蔵野市が毎月150万円くらい使っている一方、ブラシヨフ市の支払いは、センター長と日本語教師の家賃、センターの光熱費・通信費・清掃費などで数百ドルか数百ユーロ、だいたい10万円前後は負担している換算になる。財政力の違いを考えると、これ以上の負担は求められないのではないか。そこで2008年以降については、今の建物を借りるのではなく、ブラシヨフ市のもっている既存の建物をリメイクして利用することも考えていいのではないか。長期に借りているより買った方が安いのであれば、センターは現地の法人格を取得しているので、不動産を取得することも可能である。長期的な



検討課題として考える必要がある。

【委員】家賃は毎年スライドしているが、このまま増えていくということか。

【委員】当初はドル契約であったが、2004年に翌年からユーロで支払ってもらいたい旨の要求があった。ユーロ高を考えると、単純に武蔵野市の負担が2005年から2割増したことになる。契約変更の交渉ではいろいろ苦労した。

【委員】先ほどの事務局新設案に一つ賛成な事は、ブラショフの現地の責任者は一人でとても大変だと思うので、この事務局がいろいろな面でサポート部隊になるのではないかということだ。日本から遠いので、現地との交渉にも立場が弱いと思われる。そうしたことをサポートする意味で良いのではないかと思う。

【委員】それはまさしく市の仕事と思う。

【委員】市もブラショフについて特別の知識があるというわけではない。少ない情報の中で運営していくのが不安である。そうした意味でブラショフ市と対等にやりあえる枠組みが必要なのではないか。

【委員】方向、具体的に前に進める方法論を決めるのが、役所の仕事であると思う。全部を市がやるべきと言っているわけではない。

【委員】センターについて今まで知らなかった情報、例えば賃貸借契約などを知ることができた。市の交流事業課はさらにセンターと密に連絡を取り合ってほしい。

【委員長】6の市民意見についてはいかがか。

【委員】経済状況の違いから、交流が支援を中心としたもの、支援の延長上になっている。それが武蔵野市にとって重荷になっていると思う。援助支援的交流から、将来両市が対等の相互交流をしていく努力について報告書に入れていくのはどうか。センター利用者のアンケートにも、ある程度の受益者負担を受け入れてもいいという意見がある。センターを支えたい人も多いはずだ。ブラショフ市も武蔵野市に対して何かしたいとの考えがあると思う。

【委員】アンケートにあるように、少しでも授業料や使用料を支払ってもいいと思う人がいるのならば、交流の次のステップに進むためにも、支払ってもらうことは必要でないか。

【委員】このアンケート結果を見て驚いている。生活レベルで中流以上の人が、センターに来ているということがわかる。日本語教室などについて、受益者負担としてお金を払う方が、払ってまで来ている分、しっかりと続けられる面もあると思う。

【委員】アンケート回答で最低金額として出ている、10レイくらいを支払ってもらうといいのではないか。

【委員】授業料としてとると定款に触れるが、教材費として負担してもらうなら可能ではないか。

【委員】今は、教材代も無料なのか。

【委員】コピー代は取っている。

【委員】アンケートのQ15に時間・アイデア・ボランティア活動などを提供とあるが、提供したいと思う人が多い。そのような人は、人材活用の受け皿になると思う。

【委員】アンケートの回答者の年齢層はどのくらいなのか。

【事務局】中心は大学生くらいの年齢層だが、小学生から高齢者までいるとのことだ。

【委員長】報告書のたたき台について、全体を通して意見はあるか。

【委員】目次の1の「はじめに」を「目的」としてほしい。委員メンバーを掲載し、委員の任期

についても掲載すべきだ。2の(3)「検討課題」は、これから検討していくようであるから、「現状認識」、もしくは「問題認識」とするのが適当だと思う。3の(1)の1～2行目「それぞれに意義があり、」とあるが、これは具体的に書く必要がある。3の(1)の3段落目の「広報」については、別の項目をつくってPR活動として記載すべきだ。また同じく、経費についても別項目とすべきだ。3の(2)は、どのような切り口から評価しているのか、ポイントを列記すべきだ。3の(4)アに「日本への留学や日本関連ビジネスへの就職のチャンス」とあるが、たくさんチャンスがあるように誤解させてしまうのではないか。また、経費に関する記載もあるが、この内容は経費の項目にまとめるべきである。3の(5)に「交流の核になる」とあるが、核ではないはずである。また、具体的活動として、～とあるが、市民交流や広報といったもっと大きなカテゴリーでくくるべきと感じる。

【委員長】他に意見はないか。

【委員】4の「おわりに」について、懇談会としてこれからのに向けたもっと発展的な締めくくりにした方が良くと思う。

【委員】本日の懇談会の内容をまとめ、報告書の締めくくりにしたらいと思う。

【委員】「おわりに」は、「今後に向けて」としてらどうか。

【委員長】本日の意見を参考に報告書をまとめたい。再度、懇談会を開催するかどうかは、まとまった報告書を各委員に確認していただき、その後、各委員の意見を事務局でまとめてもらい、その反応をみて委員長が判断したいがいかがか。

<全委員、異議なし>

ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会設置要綱

（ 設置 ）

第 1 条 武蔵野市（以下「市」という。）が行うブラショフ市とのこれまでの交流の成果を評価し、及び検証し、今後の交流のあり方を検討するため、ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会（以下「懇談会」という。）を設置する。

（ 所管事項 ）

第 2 条 懇談会は、次に掲げる事項を検討し、その結果を市長に報告する。

- (1) これまでの交流の成果に関する事項
- (2) 今後の交流のあり方に関する事項
- (3) 前 2 号に掲げるもののほか、ルーマニアとの交流の推進に必要な事項

（ 組織 ）

第 3 条 懇談会の委員は、8 人以内とし、次に掲げる者で組織し、市長が委嘱する。

- (1) ルーマニアとの交流に関わったことのある団体等の関係者
- (2) 公募による者のうち、別に定める選考委員会が選考した者

（ 委員長等 ）

第 4 条 懇談会に委員長及び副委員長各 1 人を置く。

- 2 委員長は委員の互選により選任し、副委員長は委員長が指名する。
- 3 委員長は、会務を総括し、懇談会を代表する。
- 4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

（ 任期 ）

第 5 条 委員の任期は、平成 18 年 3 月 31 日までとする。

（ 会議 ）

第 6 条 懇談会の会議は、必要に応じて委員長が招集する。

- 2 懇談会が必要と認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。

（ 事務局 ）

第 7 条 懇談会の庶務は、環境生活部交流事業課が行う。

（ その他 ）

第 8 条 この要綱に定めるもののほか、懇談会について必要な事項は、市長が別に定める。

付 則

この要綱は、平成 17 年 11 月 1 日から施行する。

資料（ 8 ）

ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会委員名簿

氏 名	所 属 等	
石光 研二	公募	
大隅健一郎	公募	
河北 祐子	武蔵野市国際交流協会 日本語学習支援コーディネータ	副委員長
竹島慎一郎	公募	
原 博志	日本武蔵野センター 前所長	
平井 安子	武蔵野ブラッシュアップ市民の会	
横尾 勝	認定NPO法人 プロジェクトHOPEジャパン	委員長
頼 安子	公募	

( 50 音順、敬称略 )

ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える市民懇談会開催経過

回数	開催日	内 容
第 1 回	平成 17 年 12 月 15 日	委嘱状交付 委員長互選、副委員長指名 懇談会の検討事項について ルーマニア交流事業の現状について
第 2 回	平成 18 年 1 月 17 日	これまでの交流の評価について
第 3 回	平成 18 年 1 月 31 日	これまでの交流の評価について
第 4 回	平成 18 年 2 月 28 日	これまでの交流の評価のまとめ 今後の交流のあり方について
第 5 回	平成 18 年 3 月 14 日	懇談会報告書について

ルーマニアとの今後の交流のあり方を考える  
市民懇談会報告書

発行 平成 18 年 4 月

武蔵野市環境生活部交流事業課